

SMC金融・経済マーケットレポート

Reporter Your Financial Brain SMC 豊島 健治

5月の金融・マーケット動向

30年国債、1%割れ

景気はいつ回復するか？その質問に、債券市場は30年回復しませんと答えている。30年の超長期国債の利回りが瞬間的に1%を割った。1%割れの国債を買った者は、30年間経済の成長が1%に満たないデフレ状況が続くと読んでいる。それとも、他人のお金だから「仕方なし」に「安全」な国債を買っているとでも云うのであろうか。債券市場が金利バブルなのか、あるいは先見性を持った市場なのかは私には判断できないが、いずれにせよ長期金利の動きは日本経済が新たな段階に突入していることを示しているように思う。

1年前の昨年5月発行された30年国債(表面金利2.3%)の流れを表にしてみた。

	利回り(%)	価格(円)
02/05/20	2.300	100.00
02/09/30	2.050	105.52
02/12/30	1.720	113.33
03/03/31	1.291	124.42
03/05/28	1.036	131.57

1年で実に30%以上値上がりしている。債券バブルと言われる所以であるが、銀行などは債券残高を積上げ債券の利益で他の損失を埋める一助にしている。金利低下はいつまで続くだろうか？誰がババを引くのだろうか？自分は逃げられるだろうか？債券運用担当者はそんな不安と闘いながらここまで来てしまった。

100年デフレを云う者も出てきた。債券バブル崩落を云う者も相変わらず多い。いつまでもこの状況が続くとも思えないが、本格的崩落がいつ始まるのかは誰にも判らない。

企業年金、利回り悲惨

主要生保10社の昨年度企業年金利回りが公表された。軒並み2桁のマイナス、平均で12.9%となっている。一昨年が11.68%、昨年が5.91%だから3年間で年金資産が3割程度減ったことになる。

運用などせず普通預金に置いておいた方が良かったと皮肉めることは簡単だが、誰もが何らかの形で年金に関わっている現況下、こうした資産劣化がもたらす影響は軽くはない。

利鞘改善0.24%

最も貸出金利引上げに積極的に取組んだ(と思

われる)三井住友の法人向け貸出利鞘は前1年間で0.24%上昇し1.64%になったという。この数値をどう見れば良いだろうか。

順調に利上げが進んでいるのか、それとも思うように進んでいないのか。平均的企業への貸出金利を2.5%に置いていることから推測すると、狙い通りには進んでいないように見える。

ノンリコースローン倍増

借り手企業の信用力に係わりなくプロジェクトそのものに融資するノンリコースローン(非選及型融資)の残高が急増している。外資系が先鞭を切ってきたが、追従する大手銀行でも残高が昨年比倍増の2兆円に達した模様だ。あの六本木ヒルズは金融機関10数社から1,700億円をノンリコースローンで調達したという。

今後、本人資産のみならず保証人資産にまでリスクが及びりコースローン(日本の一般的な融資形態)からノンリコースへの流れが強まるのは確実だと思われる。

東京都の新銀行

東京都が中小企業向け融資業務を柱とする新銀行を来年度にも設立すると発表した。既存金融機関や専門家の受け止め方はまちまちであるが、「日本の銀行を変える」起爆剤になる可能性は大きいのではないだろうか。内部から変えられないとすれば外から変えるしかない。

問題があるとすれば、この動きも「公的部門」から出てきていることである。民間の経済活動が鈍り、公的部門がお金を使う主体となっている。お金の生産性が落ちていることと無縁ではない。

銀行貸出動向

相変わらず銀行の貸出減少が続いている。ピーク時から既に約120兆円減少した。最近3ヶ月の動向もその流れに変化はない。

	1月	2月	3月
都銀等	7.5%	7.5%	6.9%
地銀	0.3%	0.3%	0.0%
地銀	2.0%	1.8%	3.0%
信金	2.5%	2.2%	1.7%

(対前年比貸出平残)

大手銀行の貸出減少は凄まじい。中小企業向け貸出残高は昨年金額で約12兆円減少したという。貸出増加の掛け声に実体は伴っていない。これから関心の目が向く地銀の動向が気になる。